

# 赤い笹舟

戦争シリーズ①

高木徳一

時は一九八七年（昭和六十二年）七月七日。

その日は朝から小糠雨が降り続いていていた。

シュウリフア

許麗華がペンを置き、疲れた目を休めるため銀

縁眼鏡を外し、伸びをして窓から遠くを見る。

南面に高層ビルはなく、平屋や二階家が霞んでい

る。庭の梧桐樹の広い葉が慈雨を優しく受け止めていた。

けたたましいノックの音で静寂は破られ、紺色の半袖シャツにズボンの事務服を着た麗華は、

「どうぞお入りなさい」とやや大きな声をドアに

チャイン

向けた。奥目を一杯広げた張英が何時もの落ち

着きを失って、「副館長さん、大変です！」と細身

の upper を倒れ込む様にして、部屋に入った。

「どうしたのですか、張英さん？」と、色白の顔

に澄んだ黒目が光る麗華が尋ねた。

「そ、それが……。廊下で物を運んでいたら、突  
然人骨の前で老婆が日語らしい言葉で何やらわめ  
き始めたのです。これは日語の分かる副館長さん  
にお知らせねばと吹っ飛んで参りました」

「分かりました。行ってみましょう」二人はコン  
クリートの階段を降り、小走りに西端に行った。

黒山の人民服やチャイナドレスの背に、「皆さん、  
副館長さんが来られたので、どいて下さい」と、

張英が高音を発した。群れが割れた。壁に塗り込  
められた脚の骨を爪で漆喰から鬼の形相で剥がそ  
うとしている老婆が麗華の網膜に焼き付いた。

麗華はハツとして五十年前の我が姿と重なった事  
を認識する。静かに近付き、跪いて、「お婆さん、

どうしたのですか？。訳を話して下さいな」穏や  
かな日語で話し掛けた。しかし、何かに取りつか  
れた様と同じ動作を繰り返している。傍でおろお  
ろしている婦人が、「私の母ですが、急にこの骨を  
持って帰るのだと言いました。これは展示

品で見るだけだからと言いつても無駄でした」と青腿めた顔色で、日語で喋った。

「それで、どんな理由で骨が欲しいのでしょうか？」と麗華が顔を上げて話している途中に、「母さん、駄目じゃない。私がトイレに行ってる間は、あれ程動かないでと言ったじゃない」とのキンキン声が麗華の耳介を覆った。「だって、お前。お婆さんがズンズン一人で行ってしまったんだよ」

「お婆ちゃんが変な行動をすれば、物見高い中国人が寄って来てしまうよ」「あのう、私はこの副館長の許麗華と申します。何か事情がお有りのようですので、ここでは何ですから私の部屋にお出で下さいな」「これは失礼致しました。私は田畑優子です。こちらが母の咲子で、お婆ちゃんの名は美穂子です。さあ、お婆ちゃん。副館長さんがお話を聞いて下さるつてよ」「夫の魂の叫びが聞えるんじや、この骨からな」「お母さん、これは中国の人ですよ」「そんな事、ありやせん」「中国人と日

本人の区別がつきませんで、少しは日本人のものもありましょうや」「ほれ、みい」「お母さん、お部屋に伺つて、お話を聞いて貰いましょうね」

「いいや。この骨を貰うまではここを動かんぞや」「お婆ちゃん、私が中国語でお婆ちゃんの気持ちを代弁するから安心して行きましようね」「これが欲しいんじや」「分かりましたよ、お婆さん。地下室に沢山人骨が御座いますから、そこに行つてみましょう」やつとの事で美穂子は咲子に手を取られ、杖を助けに背を丸めながら麗華と張英の後に続いた。日本語での遣り取りに、チンプンカンプンの野次馬は散った。

麗華としては美穂子の行動を群衆に説明しようかと思つたが、旧日本軍の家族が遺骨を持ち帰りたいのだと言えば、観衆が激怒するのは火を見るより明らかだったので、何も喋らない事にしたのだ。展示室中央を経て、正面玄関脇の地下への階段を紬姿の美穂子は手摺りにつかまりながら一段一段

降りた。木製の扉が開かれ、足を踏み入れた美穂子の頭皮を貫いて脳の髓まで幾多の叫び声が押し寄せてくる。苦渋、怒り、悲しみの顔貌が重なり合い、団栗目に痛みが走った。

美穂子の肩が叩かれ、「お婆さん、この骨を部屋に運んで、事情をお聴き致しますよ」との麗華の和んだ声があった。「その脚ではないんじや。あそこの頭骸骨がわしに話し掛けてきおったわ、善吉じや」とぼんやりした照明に浮かんだ前方の棚に、美穂子は皺が刻まれた指を差す。麗華は後悔する、自分らが地下から脚を運んで渡せばよかったと。声の主の前で、美穂子は手を合わせた。

（おう、よく来てくれたわ。長い事待ちわびていたぞ）「あ、貴方、貴方なのね」（そうよ。善吉だ）団子鼻で頬骨の出た、濃い眉の善吉の長い顔から涙が落ちた。『免なさいな。一日たりとも貴方を忘れた事はなかったけど、中々来る機会がなくてのう。孫娘が中国語を勉強しよって、連れて来て

くれたんだわ」（ここでは日々中国人に囲まれ、息苦しかったわ。はよう、日本に戻してくれ）

「ここに居るのが双子の娘の長女咲子よ。貴方が出征した時に身籠っていたの」ふつくら頬で緋を着た咲子の手を取り、頭骸骨の前に押しやる。

「咲子よ。父さんだわ。よく顔を見て貰うんだな」「本当に父さんなの」「そうや、父さんの声が聞えたんや」（おらの娘か。よう、育ったわな。苦労掛けたな）「仕方無いわよ、貴方。国中の女は皆銃後を守っていたんですもの。それに、こつちが孫の優子だわ。貴方に似て負けず嫌いで、中国語を勉強したお陰で、こうしてここに来られたわ」（そうか、孫も居るのか。一緒に遊びたかったな）

「お婆ちゃん、大丈夫。誰と話してるのよ？」やや垂れ目の優子は祖母が気が触れたのかと思いつながら、美穂子の丸まった背に手を乗せた。

「お前のお爺さんと話しておるんじや。お爺さんが居たからこそ、お前がここに居るんじやよ」

「そりゃあ、そうだけど」「ほら、お爺さんが笑つておるが」

夫との会話をしている最中に、低音で深味のある音調が遠くから届いた。(おい、美穂子。兄の事を忘れおったか?)「えつ、栄樹兄さんなの。ど、何処よ?」(ほれ、お前から見て、左前方の一番下の棚に追いやられておるわ)「忘れてたなんて、酷いじゃないかね、兄さん。明日は帰ってくるかと両親と毎日村の鎮守様にお祈りしていたわな」

(そうか。無念にも善吉共々討ち死にじや。よくぞ、探しに来てくれたな)

美穂子が声のする方へ伝え歩きをして行くと、角張った顔の偉丈夫な幻影が立ち上がり、導いてくれた。眉間に刀の傷痕が見られる頭蓋骨の前で幻影は消えた。「兄さん、長い事異国の地で淋しい思いをさせて堪忍な」(運良く、善吉と選ばれてこの棚に並べられ、話し合いが出来て、淋しき、退屈さを紛らす事が出来た。しかし、この下の土の中

に幾多の日本兵士が埋まっていて、彼らとは交流が出来ん。それが不憫だな)美穂子は兄に娘と孫娘を紹介した。「兄さん、一緒に日本に帰りますからね」(なんだか、戦友に気がひけるなあ・・・)

「おらが先陣を切れれば他の家族も探しに参りますから、気にする事は無いですわ」

事がここに至っては、老婆の要求にある程度は治う以外にないと麗華は思った。張英に指示し、これらの頭骸骨を白木の箱に納めさせる。

一行は二階の副館長室に向かった。部屋は、南に窓が見え、東にやや大きな木の机と北にガラスの書棚があり、西に長四角のテーブルが配置された簡素なものであった。

優子、美穂子、咲子の順に西壁を背に木製の椅子に座った。対面には麗華と張英。

テーブルの中央には二つの骨箱が並ぶ。

「それでは、どうぞ、お婆さん。思いのたけをお話し下さい。日本のご婦人からこの様に直接戦争

中の事情をお聞きするのは初めてです。私は戦前日系造船会社の支社長の秘書兼通訳をしておりましたが、戦後暫くは百姓をしていたので、日語は大分忘れしました。この張英は私が日語を教えて、未だ片言ですので、是非優子さんが通訳して下さいね」「勿論です。上手く訳せるか自信はありませんが」「大丈夫です。不明な点は遠慮なく聞き返しますから」「はい、分かりました。それでは、お婆ちゃん、話していいわよ。中国語になおすので、途中でお話を止めるからね」「話していいのけ?」「ええ、いいわ」「あれは、忘れもしねえ、今から五十年前の昭和十二年の八月十日じやった。七月七日に日中戦争がおつぱじまつてのう。油蟬が賑々しく鳴きおつた。家族四人で野良仕事をしていた所、郵便配達夫が赤紙を兄に渡しおつた。家族は泣き崩れたが、父がお国の為と兄を励ましたわ」「お婆ちゃん、そこまでにして。中国語になおすから」と、優子は言いつつ、走り書きしたメモ

を見ながら流暢に翻訳した。「はい、お婆ちゃん。続けて「時を同じくして三軒先の農家の一人息子池島善吉にも召集令状が舞い込んだんじや。五つ年上で、野菜市場でよく顔が合い、話が合ったお人じやった。両親が前々から嫁入りを勧めていたで、戦地に行く前に仮祝言を上げたわ。新婚一ヶ月目に兄と一緒に戦争に狩り出され、南京からの葉書一枚を残し、翌年白木の箱の石ころになって帰つて来た・・」美穂子は嗚咽交じりに喋り、その目の縁を咲子がハンケチで拭う。感受性豊かな優子は貰い泣きを必死に堪えて、通訳する。

「何処の国も、残された家族は辛い思いをしきたんですわ」と、麗華は淋しげな声調で老婆に日語で話し掛けた。「そうだわな。ここでの展示の写真や映画が日本兵の数々の悪さを示しておるが、兄は優しくつたんだわ。病弱だった一番上の姉の手を引き、学校に通つたり、姉が病床に臥すと野の草花を枕元に置いたわな。看病の甲斐も無く、

姉は十二歳で亡くなった。自分も池で溺れたのを助けられたり、悪童のいじめからかばってくれたわ。そんな純粋な心根の兄が惨い仕打ちをしていったなんて、どうしても信じられねえ」優子の訳が終わると、麗華は抑揚の強い中国語で喋った。

「お婆さん、戦争と言ふ魔物が人間性を奪い取り、国家の為、天皇の為、軍の為と洗脳し、相手を痛めつけたり、殺したりする様にして一部の権力者が庶民を人形と化してゆくのです。ですから、戦争自体が悪者です。しかし、国家間、民族間、宗教間などで、話し合いで決着が付かないと戦争へと突き進んでいます。その事を歴史が語っています・・」  
「そこでお待ち下さい。日語に翻訳しますので」「あら、ご免なさい。つい、むきになって麗華の内容を聞いた咲子が口を挟む。

「戦争は子供の頃で、栃木県の日光の片田舎でしたから米軍の飛行機からの被害は殆どありませんでした。太平洋戦争が終わっても、母は夫と兄の

遺骨を見るまでは信じられん、何時かきつと帰って来ると毎日口癖の様に申しておりました。遺骨収集をしたくても、国交は断絶状態で、やつと田中角栄首相が周恩来首相と日中共同声明で国交を回復させました。しかし、南京だけが手掛かりでは何処をどう探してよいやら分かりません。そうこうする内に、二年前にこの記念館の開館が大きく報じられました・・」  
「そうなんです。昨年就職先の旅行社の海外研修で、ここに来て多くの写真や資料が展示されていたので、もしかしたら戦死した祖父や祖母のお兄さんの遺品が有るかもと考え、お婆ちゃんを今回誘ったのです・・」  
「優子さん、難しい日本語は分かりません」との麗華の日語が飛んで来た。「あら、ご免なさい。夢中になって母の言葉を変換するのを忘れていました」「当事者の一員となれば、自分も話したくなり、通訳を忘れますよね。私も若い頃には失敗しましたのよ」との気を遣ってくれた日語が続いた。早速、咲子

の箇所を中文にして伝えた。

そこに、温い烏龍茶が運ばれ、皆喉を潤す。

麗華は茶を飲み干した後、遠くを見遣る様な目付きになり、重い口を開いた。その中国語を優子は必死に翻訳する。南京城陥落の二カ月後、近郊に住んでいた夫と次兄が日本兵殺害の共謀罪で連行され、公開処刑になったと言う。長兄は用事で家を留守にし、義弟は盲腸で入院中のため、難を逃れたとも。長兄と中華門に駆け付け、『二人は兵隊ではなく農民で、自分と一緒に畑仕事をしていて日本の兵隊さんをあやめる事は出来ません、これは何かの間違いですので、もう一度しっかり調べなおして下さい』と、日語で叫び、土下座した由。その脇で軍刀が抜かれ、一撃のもと夫と次兄は血を噴出し、絶命したと。無礼打ちに致すとの大音響とともに軍刀が迫ってきた時、女子供に手を出してはならぬとのドスのきいた声が響き、命拾いをしたとの事。日本人に対する憎悪の炎がメ

ラメラと燃え上がった瞬間だったと。しかし、戦前は日系造船会社の上海支社長の秘書兼通訳をしていて、派遣技師の方と恋に落ち、二人だけの婚約をした直後に戦争が勃発し、生き別れになったとも。日本人に接し、心が成長した矢先の戦争が自分の人生を狂わせ、日本人嫌いを引き起こし、無念さを引き摺って生きてきたと言い、麗華は瞳をキラリと光らせる。

じつと耳を傾け、麗華から優子に移った口調を聞いていた美穂子は沈み声を発した。

「不思議な巡り合わせだのう。貴女もご主人とお兄様を亡くされて、それも自分の目の前での事さぞお辛かったですでしょう。わしとは比べもんにならない位に・・・なんと慰めの言葉を掛けてよいやら分かりませんわな。お互い悲惨な過去を背負ってききましたのう」

優子は引き続き会話を仲介する。

「最愛の人を失った悲しみは誰でも、何処の国で

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。